

# C-up ワールド

## 2003年5月号

### 2003年4月の山行記録

#### 自主山行

タカマタギ～日白山、荒沢山

4月11日～13日

#### 参加者

田口浩昭・山野昭人・山野美香・横川秀樹  
計4名

#### 天候

4/12 曇のち雨  
4/13 雨のち曇

#### 行程

4/11 夜21時半、東所沢駅集合。  
車で土樽駅へ。駅泊。  
4/12 土樽～棒立山～タカマタギ～日白山～土樽  
4/13 土樽～荒沢山～土樽

#### 山行のポイント

残雪期の歩行。ルートファインディング。  
雪庇、雪崩など危険の予測と対処。  
危険箇所でのすみやかなザイル処理。  
気象条件による撤退など、的確な判断力を養う。

#### 感想

♪4月になれば彼女は  
きっと来るだろう  
雨で小川の水かさが増す頃は♪  
(サイモン&ガーファンクル)

4月12日、土曜日、朝5時半。  
男三人と一人の女は、駅を出て目的の山へと向かった。予報が外れたのか幸い雨は降っていない。きょうはラッキーだ、と誰もが思った。

4月になればきっと登れる。

土樽駅前の魚野川が雪融け水で水かさを増す頃には・・・。

目指すは、TとYにとっては、三度目のチャレンジとなるタカマタギだ。A人とM香にとっても二度目の挑戦である。しかし、これまで誰も登頂していない。言わば鬼門の山だ。二ヶ月前には、4人は直前のピーク・棒立山まで行ったが、時間の関係で引き返さざるを得なかった。あの残念無念ああ無情の敗退の思いを払拭すべく、きょうこそは登らねばならない。そしてさらに奥の日白山まで行かねばならない。そしてそして、美味しい酒を飲まねばならぬ・・・。山は哲、そして、山は酒なのだ。ピークの向こうにあるビールを目指して、大滑沢の北側にある尾根から、まずは棒立山を目指した。

このルートからの入山は4人にとって初めてだったため、雪庇が気になるヤセ尾根などでは、念には念を入れ積極的にザイルを出す。標高990mの稜線に出てようやく一息ついた。ここまでは予想以上に悪いところが続いていた。これから先は南西へ伸びるゆるやかな尾根を通り、この尾根が途中で北西へと進路を変え、傾斜は再び厳しくなっていく。そして、1270mの高さに達したとき、4人は息を飲んだ。目の前のヤセた尾根とその両脇の急斜面に、幾つもの亀裂が入った雪の層が張り付いている。気が付くと回りは、ひび割れた厚さ2mほどの雪に取り囲まれていた。どうやらブロック雪崩がいつ起きてもおかしくない危険地域に踏み込んだようだ。雪山経験の浅さから雪崩発生の確率はなんとも分からないが、ここをまっすぐに突っ切る以外に登頂への道はないことだけは分かった。

意を決し、Yは雪に衝撃を与えないようにそっと目の前の雪壁を登っていった。3m進み、ピッケルの

石突きを刺したそのとき、鈍い音とともに足元の雪面に縦に一本長い亀裂が走った。その瞬間、亀裂の右側の雪塊がドスッと落ちた。

新米アルピニストの気力を萎えさせるのに、十分な一撃だった。長さや幅が10m、厚さが2mはあろうかという巨大な雪の塊が、スピッツェの一突きで真っ二つに割れたのは衝撃だ。実際に、足元から雪崩が起きたわけではなく、僅か数センチずり落ちただけだったが、4人は撤退を決意した。TとYにとっては3度目の、A人とM香にとっては2度目の敗退となった・・・。

翌13日朝、土樽駅の屋根を雨が叩いていた。

Rainy days and Mondays always get me down....

同期のヤナギなら、間違いなくカーペンターズを口ずさんだことだろう。

予報では、天気は回復にむかうはずなので、5時半出発の予定を少し遅らせる。時計の針は6時を過ぎ、6時半を過ぎ、ついに7時まで待ったが雨は上がらない。仕方なく憂鬱な気分のまま出発することにした。

土樽駅前の橋を渡り、魚野川右岸を下流に進む。3つ目の沢を越えたところが、荒沢尾根の取り付きだ。雪はかなり融けていて、斜面は所々地面が見えている。雪のないところは今にも滑りそうで危ない。木の枝などをつかんで慎重に進み、20分ほどで尾根上に出た。ここからは傾斜は緩やかになり雪も消えているが、そのかわり藪がひどい。4人の進路を阻むように、これでもかというくらい藪が生えている。途中、YとTは、「ちーん、マイッタ。藪よー、そんなに俺達をイジメナイでくれ〜」とか「金沢さーん、俺が悪かった。もう雪山自主をやりたくないなんて二度と言いませんから勘弁して〜！」と支離滅裂に叫び、七転八倒阿鼻叫喚、もたえ苦しむ雪山中毒者地獄の藪漕ぎの図となった。

と、ところが、ひとりA人だけは、どうも様子がおかしいではないか。顔がニコニコしているのだ。まさか藪を楽しんでいるのでは・・・、と思ったその

とき「あー、オレ、藪の極意がわかったんだなあ〜」というツブヤキが聞こえてきて、TとYは呆然。しかし、M香はそんなA人を頼もしそうにウツトリと見つめていたのだった。

さて、目指す荒沢山は標高1303m。1000mを越えたあたりから、尾根上にも雪が出てきた。ところどころ崩れそうな雪庇や、急な雪壁があったが、何とか乗り越え山頂についた。時々晴れ間も見えるほどに回復した天候のもと、4人はガッチリと握手。帰りはカドナミ尾根を下る。途中、足拍子岳への稜線を振り返り、V字に切れ落ちたキレットを見て、来年は藪がウルサクなる前にあそこをやろうと心に決めつつ、土樽へと戻った。

報告者 横川 秀樹



### 自主山行 北アルプス蓮華温泉より朝日岳スキー登山 4月12日~14日

#### 参加者

岩本一郎 (L)・宮下裕史・坂口理子

計3名

#### コース・行程の概要

4/12 (土) 雨 梶池 9:00-天狗原 11:20-13:00 蓮華温泉

4/13 (日) 晴 蓮華温泉 6:15-瀬戸川 7:15-12:50 朝日岳-瀬戸川 15:20-17:40 蓮華温泉

4/14 (月) 晴 蓮華温泉 7:30-角小屋峠 10:00-12:00 木地屋

#### コースの核心・ポイント

蓮華温泉から朝日岳はロングコースなので、好条件の時にスピーディーに往復することが必要。

瀬戸川を渡り、手際よく白高地沢側のルートにのること。

稜線のクラストした雪面や風に対応しスキーアイゼンを使用する。

#### 感想

4月上旬の蓮華温泉へは山スキーで多くのパーテ

ィーが入山するが、朝日岳に向かうパーティーは、まれである。今年は条件に恵まれ朝日岳に登頂することができたので報告する。

蓮華温泉から瀬戸川まではわずかに登りがあるものの、シールは無しで行く。兵馬の平から瀬戸川の谷へ滑り降りると、うまく渡渉点におりた。スノーブリッジがあったのでそれを渡る。残雪は多いようである。

ここからシールをつけ朝日岳を目指しての登りの開始。右手に白高地沢が見えてくる。入山時が雨だったこともあり、今年は白高地沢の沢床に入らずに右岸上をいってみようと思う。右岸上の登りはきつそうに見え、思わず右の沢床に逃げたくなるが、逃げずに進む。取り付いてみれば快適で、予定のルートでシール登頂することができた。白高地沢左俣を越して進んでいく。

朝日岳のフトコロといった感じの1800m付近で休憩。やや早いがスキーアイゼンをつけ、樹林に沿って登り、広いカール状の底に出る。カール状の左側の雪の斜面を電光型に登ってゆく。ガスが去来しているが、時折山頂部も見えている。うっすらと残るトレースをたどる。風当たりがあり、雪面がクラストしている。スキーアイゼンのおかげで、吹かれても足元に安定感がある。最後の登りと思われるお饅頭状を登る。ガスで視界のきかない中、不安な登りである。このお饅頭のどこかに山頂があるはずだと思いつつゆっくり進む。一瞬ガスが消え山頂標識を発見した。思わず叫ぶ。ガッツポーズ。数年来の念願かなっての登頂である。3人で固い握手を交わす。

登頂の感激をかみしめるのもそこそこに、下りにとりかかる。幸いにもガスは晴れてきたので、地形を見ながらゆっくりと前進し、トレースが確認できるところから滑りだした。クラストした雪面で滑りにくい。山頂部から一段下がると雪の状態も良くなり楽しく滑る。こんな広い山を我がパーティーで独占である。大斜面を滑ると自分のスキーで落ちる雪の破片がバラバラと追いかけてくる。静かな山の中でなんかにぎやかな滑降である。Sさんはマイペースで続いてくる。Mさんはなぜか超大きい斜滑降で見えなくなるほど遠くを往復している。三人三様、明るい春の山スキーを満喫である。1800mまで下り、ここからも登りトレースを追って滑ることにする。沢床ではないので登りや歩きがあるかと思っ

ていたが、ほとんどなく快適である。長い下りで充分楽しめた。白高地沢を離れ瀬戸川へと回り込み、往路をたどることによって、蓮華温泉へと帰着した。

今回は条件に恵まれたことも含めて成功山行と思うが、反省点もある。ステップアップして、白馬岳から雪倉岳へのスキー縦走を目指したい。

報告者 岩本 一郎

△△△△△△△△△△△△△△△△

## 自主山行 丹沢水無川流域木ノ又大日沢進行 4月27日

### 参加者

L 矢田 実(同人)・松本 善行(同人)

計2名

### コース・行程の概要

戸沢キャンプ場→水無川入渓点→F1～F5→  
木ノ又大日沢出合→木ノ又大日沢遊行→  
木ノ又大日小屋(終了点)→表尾根・政次郎尾根経由  
(約1時間30分)→戸沢出合

- 水平距離 2000m
- 滝の登攀グレード F2 5m 2級
- 標高差 800m

### コースの核心・ポイント

終了点の広大なガレ場のツメとグレード的にはF2・5m2級だが、足なれたパーティなら問題なく通過できる。むしろ、途中までの水無川本谷のF3・F5の方が注意が必要。

### 感想

木ノ又大日より源を発し、水無川本谷F6の下に流れ込む派生ルートで、源頭は広大なガレ場となっている、初級・人気度1のマイナーコースだ。水に恵まれた明るい沢が、グレード的に目立った滝もなく、このコースを目当てに計画を立てるパーティは少ないと思う。本谷と間違える人は多いと思うが・・・とにかく静かな沢だ。

滝で待ちたくないの、AM5:50一番に戸沢を出発。天候は予想に反して、小雨模様。沢始めのせいかなんとなく足捌きがしっくりいかなかったが、F

1、F2を問題なく通過する。

水無川本谷は人気ルートだけに、セドの分岐や滝ごとに表示がある親切な沢だが、あまり過剰なサービスは沢の面白さを半減させるようで感心できないと思うのは私だけだろうか？

F3左壁のクサリ場を、松本氏に確保してもらいリード、トラバースのいやらしいルートだ。さらに続くF5の右壁をリード、クサリ用の支点にランニングを取るが、内の何本かはぐらぐらして頼りないので、慎重に進む。沖の源次郎分岐で偶然書策新道を登ってきた、金沢・坂口組と合流。休憩しながら、ルートを観察。今日は雨で濡れていて登りづらそうだった。

休憩後、出合から木ノ又大日沢へ突入、F1～F3を快調に通過。源頭部で多少の藪こぎがあったものの、無事終了点に到着（AM9:00）約3時間のコンパクトな沢登りだった。

小屋で休憩の後、丹沢の沢の登り下り一日7～8本の計画で盛り上がりながら政次郎尾根経由で戸沢へ下山。

報告者 矢田 実

△△△△△△△△△△△△△△

## 投稿

### C-UPコラム『新人クライマーのひとごと』

#### 第6回

#### まだエイト環？ 現代確保器事情なのだ！

「ムーアの法則」というのがある。パソコン好きの方はご存知だろうが、これはインテル創設者の一人 Gordon Moore 博士が1965年に経験則として提唱した「半導体の集積密度は18～24ヶ月で倍増する」という法則だ。要は、パソコンの処理速度は指数関数的に急激に伸びていくというものである。

21世紀を迎えた今、現実には半導体の性能の伸びは鈍化したようだが、まだこの法則が当てはまっていると思われる分野が、実はクライミングの世界に存在する・・・、としたら、それは多分、確保器（ビレーデバイス）の分野ではないだろうか。

「ROCK&SNOW」の2002年春号を参考に、確

保技術の変遷を振り返ってみると、まず、肩がらみ、腰がらみなど身体を使ったものから、カラビナを使ったグリッピビレー、そしてエイト環へと進化し、その後、イタリアンヒッチ（半マスト）も使われるようになる。そして90年代、ブラックダイヤモンド社がATC（Air Traffic Controller）を発表し、フリークライマーの中で代表的な確保器としての地位を築いた。そして、今ではさらに機能の向上を狙ったものが続々と登場してきている。

さて、そうした中、無名山塾では原則として確保器はエイト環を使うことになっている。これは、エイト環が確保にも下降にも使える万能器具であり、初心者に分かりやすいという配慮からであろう。これはこれで山塾の良さでもあり、山塾ならではのこだわりでもある。岩崎さんも「日和田はエイト環に始まり、エイト環に終わる」と言っている。ような気がする。言っていない？

しかし、前述の通りエイト環を性能で上回るものが多数あるうえ、本科2年生ともなればダブルロープの機会も増えるので、エイト環だけでは都合が悪い。なので、他の確保器についてもある程度は使いこなせなければならない。ではどれがいいのか・・・、といっても、全て万能というわけではなく、それぞれに得意分野があるようだ。ごく簡単にまとめてみると

1. ATC⇒とりあえず定番。類似品多数あり。
2. ジジ⇒セカンドの確保専用。セルフロック
3. ルベルソ⇒ATCにジジの機能を付加
4. ファシル⇒エイト環とジジを合体
5. グリグリ⇒オートロック（シングルロープ）
6. シリウス⇒オートロック（ダブルロープ）

この中で、ジジとシリウスは使ったことがないので何とも言えないが、それ以外の4つの中で考えると、ダブルロープのアルパインクライミングではルベルソが良いと私は思っている。カラビナをひとつ余分に必要とか、ロックすると解除しにくいなどの不満点はあるが、懸垂下降もできるのでエイト環を持つ必要はない。連続した長い下降がある場合は別)

また、整備されたフリーのゲレンデや人工壁では値段は高いがグリグリが安心だと思う。ただし、ア

ルパインのゲレンデやルート（支点にリングボルトやハーケンが使っている岩場）でのグリグリの使用は避けるほうが賢明だ。これは4月の机上講座で新保講師が指摘していたことでもあるが、墜落を急激に止めるため、強い衝撃が中間支点に加わってハーケン等が抜ける可能性が高くなるからだ。

さて、最後に、エイト環にロープを通したり、外したりする際の手順についての一考察を。

山塾の多くの方が体の横（腰のギアラックのところ）でカラビナに付けたり外したりしていますが、とてもやり辛そうで時間のロスが多いように見受けられます。

私は、環付きビナとエイト環をセットで、腰のギアラックから外し、そのままハーネスのビレイループに取り付け、ロープを通したり外したりの操作は常に《体の正面》でやっています。そして、再びギアラックに戻すときは、エイト環と環付きビナをセットで持って戻します。つまり、環付きビナとエイト環は常に一組のものになっています。ビナの持ち方さえ覚えればエイト環を落とす心配はありません。（エイト環が小指の下側にくるようにしてビナを持ちます）

これまでのやり方で時間のロスが気になっていた方は、一度お試しください。このやり方の場合、ATC類を別に持つときは、ATCにもそれぞれ専用の環付きビナを持つことになります。（秀）

## 編集局から

結局5月号は、自主山行の記録だけになってしまいました。自主山行記録を書いている方が、さらに基本的なトレーニングメニュー講習の山行記録を依頼されたら忙しいことでしょう。自主山行が増えてきていますので、最近は講習山行原稿依頼をほとんど出しておりません。ちょっと編集局は楽しませていただいています。谷川岳西黒尾根講習（4/20）、大渚山スキー講習（4/13）はなかなか楽しかったので原稿依頼を出しても良かったかな？とも思いましたが...。西黒尾根もタカマタギ自主のご報告と同様ところどころ雪が割れてました。霧と強風の中での谷川岳登頂成功でした。風速20mくらいはありま

したか？。顔が凍傷こなりそうな2月、3月の冷たい風ではないので余裕はありましたが、経費豊かな講師が付いていない自主山行だったら、撤退していたことでしょう。霧の中では、前方の岩の稜線の先がどうなっているのかわからず、大いに不安でした。今年3月の雪洞泊翌日の天神尾根からの登頂が吹雪のためできなかったのでうれしかったです。去年の天神尾根に続き、今年も西黒尾根から登頂成功でした。今年も来ちゃったよっ！谷川岳君！」と胸の中で山に話しかけて、感激の登頂でした。これで谷川岳天神尾根→平標山→白毛門山→谷川岳西黒尾根と、雪山ルート集での雪山キャリア推奨ステップアップメニュー通りの順番で去年、今年で登頂完了です！！

大渚山スキーは、最高でした。大渚山山頂からは、急斜面の広い雪面をすべり、湯峠を越えてしばらく歩いた後は、そんなに樹木が密でない樹林帯の中のアップダウンのある雪面のすべりがあり（今回はこの樹林帯内をすべる意外な楽しさを満喫。1月の八子ヶ峰は密な樹林帯で滑れませんでした。疎な樹林帯はかなり楽しいですね。玉原高原のニヶヶ山も結構楽しいのかも？）その後は山田旅館裏山の天然グレンデを滑って、即旅館に帰還という3種類の滑りが楽しめるなかなかいいコースでした。裏山の上から見下ろすと真下に旅館が見えるというシチュエーションは、なんか妙というか面白いですね。最後は、斜滑降から急降下爆撃機風に滑り降りて（落ちて？）旅館着。ブレーキが甘く、もうちょいとスピードを殺せませんでした。もっとグレンデ練習せねばと思った次第でした。山田旅館では、元ノルディック複合（ジャンプ・クロスカントリー）日本代表荻原さん（たぶん次晴さん）発見。午後3時くらいになると、裏山の上でうじゃうじゃと次々にスキーヤーが湧いて出て、旅館に滑り降り帰ってきます。大渚山は、山スキーのメッカですね。ということでちょっと原稿依頼を出しそびれた講習の紹介も少々...

今後も山行原稿よろしくお願ひいたします。

**アドレス**

無名山塾

<http://www.sanjc.com>

Phone 03-3941-3481

Fax 03-3941-3482